

## トヨタの輝きを陰で支える人たち

TOYOTA、トヨタ、世界規模の自動車メーカーとして、その成長の足跡や企業精神は、トヨタ自動車が大きくなると共に注目を集め、その生産方式も広く世界に普及して来た。しかし、この国際的な著名企業が中興時代に地元の市民団体の支えを受けた歴史はあまり知られていないようだ。公益財団法人あすでの理事長豊田彬子氏は、今でも続いているその物語を語ってくれた。

### 豊田に集まってきた勤労青少年

1960年代、日本が高度成長時期に入った。1962年にトヨタ自動車工業の生産累計が百万台を達成し、1965年には二百万台を突破した。市場のニーズに追われよう、生産能力を高めるために、豊田周辺地区に部品製造工場が次々に建設された。それと同時に、日本全国から働き手を迎え入れるための独身寮の建設や、厚生施設の整備も懸命に行われた。

大企業でも寮を間に合わせるのに精いっぱいであった。まして、関連の中小企業などにとって、状況はもっと厳しく、地元の人達の空いている蔵や物置スペースも新入社員の宿舎に使われた。全国各地から来た中学校を卒業したばかりの青少年が、車を作る夢を抱えて、豊田で新しい生活を始めた。しかし、彼らの毎日は、狭い部屋で五～八人が集団生活を送り、会社と寮の往復ばかりであった。たまの日曜日の休みにも気分転換できるものもなく、郷愁を駆り立てられ、身を持って余すような状況であった。その中の一部の若者が非行に走り、のどやかな農村地帯にこれまでのないような事件を起こしたり、脱落するものも増えて、社会問題に発展していった。

新しい工場が作られた豊田市西南方向の高岡地区にも、このような問題は例外なく押し寄せてきた。村中が一つの家族のような地域であり、見知らぬ少年たちをことのほか警戒した。例えばスイカがなくなったとか、良くない出来ことが起きると、「あの子たちじゃないか」と疑うこともあった。しかし、まだあどけなさが残る彼らの顔から、地区婦人会のお母さんたちは、ふるさとを遠く離れて働きに来た少年たちの母親の気持ちに思いやった。この少年たちの母親がわが子を思い、息子の幸せを祈らない日は、きっと1日たりともないだろう。新しい生活にまだ慣れない彼らを、のけものにし、ただ見て、批判しているだけでよいものなのか。私たちの地域の経済発展に貢献している彼らは、いつか私たちのお隣になるかもしれない。豊田の明日を担う青少年たちに、母親代わりのことをしてあげたいと考え始めた。

## 「憩いの家」の誕生

婦人会の皆さんがそう考えているとき、ある牧師も同じ問題に悩んでいた。教会を訪ねて来る青少年が、夢と現実の格差の大きさに失望している姿を見ての悩みである。婦人たちは、牧師からアメリカにおけるボランティア活動の話などを聞き、青少年におふくろ役として奉仕活動をしたいという思いを募らせた。そして、ある県会議員にこの考えを相談したところ、重要な問題として捉えられ、勤労青少年が健全に成長するための施設が必要だとなった。1966年、各方面の協力の下で、地域周辺の2社以上の企業の出資によって、勤労センター憩いの家が高岳地区の、畑と緑に囲まれた小さな丘に建てられた。民間企業が勤労青少年の健全育成を願って作った施設が世間の注目を集めた。

休みの日に集まってきた勤労青少年たちは、ここでスポーツをしたり、文化的な娯楽を楽しんだりして過ごした。ボランティアのお母さんたちは暖かいお茶を出し、作業服にテープで張り付けている破れたところをミシンで繕ってあげた。表情が冴えない子を見かけたら、声をかけて話の相手になってあげた。心の辛さを聞いてもらったその子は、会社を辞めて帰郷しようと思ってやってきたのに、気持ちが晴れて帰っていった。

施設の運営資金は、必ずしも充分ではなかったため、ボランティアの人達は、バザーを開催したり、自分が作った野菜を持ってきて若者においしいものを作ってあげたりした。祭日には楽しい雰囲気イベントを催したり、青少年たちに温かい家を感じてもらえるように、みんな一生懸命であった。このような勤労青少年の成長を願う活動が豊田市全地域の婦人ボランティア団体の形になり、憩いの家に来た誰もが心が温められた。

## 時代とともに進むあすて

トヨタ自動車が大きくなるにつれて、社員教育と厚生福祉制度が充実され、豊田市の商業娯楽施設も日々豊富になった。憩いの家も時代とともに、その形と内容が修正されて来た。よりよい社会の実現に向けた運営目標は、さまざまな人々を惹きつけ、ボランティアの人数が増加した。2013年に、46年間、活動を続けていた憩いの家は、公益財団法人あすてと変更された。そして、今は、外国人も含め800名を超える会員で、40個以上のボランティア団体が登録されている。新しい建屋の中に、年齢も異なり、幅広く種々の経験を持つ人々が、集まって来ている。

1980年代後半から自動車産業はさらに発展し、他の国とのかかわりがますます密接になった。海外赴任のトヨタ関係者と、豊田に研修や仕事で来る外国人が増えてきたことで、豊田市は国際的な都市に変わって来た。更に、日本に働きに来る外国人も増加し、豊田市の外国住民が多くなった。母国を離れた外国人にとっては、言葉や文化も違うし、生活習慣も

同じではない。豊田市が、このように異文化が入って来たことで受ける影響は、二十数年前によその地から就職に来た若者達が与えた影響の再現だ。人々は国際理解と国際交流の必要性を意識しはじめた。

豊田市在住の外国人が日本の環境に溶け込む手助けや、多文化共生を促進するための活動は、あすでの時代に応じた転換であった。海外で生活経験のある人々があすでのボランティア活動に加わった。「我々が外国で言葉が通じず、習慣もわからない。生活にいろいろ困っていたとき、地元の人々に助けられ、とても良い思い出になりました。豊田に来た外国人たちにも淋しさと不便さを少なくしてあげたい。」というのが彼らのボランティアの動機であった。かつての憩いの家は、豊田市に暮らす外国人が周りからの温かみを感じ、淋しさを忘れる場所となり、あすでは20数年前の原点に戻った。

2004年、豊田市及び周辺の地域に暮らしている中国人があすでに集まり、華豊の友という組織を登録した。それ以来、日中の民間交流はあすでの活動の一部となった。

### 内モンゴルの砂漠にあすでの森

華豊の友は、あすでの理念の中で成長してきた団体である。明るく親しみやすい中国人の気質を持ちながら、日本人の強いチームワーク精神も持つ。華豊の友は、結成以来ずっと多くの日中の文化交流活動を計画的に続け、日本人社会に溶け込み、豊田市民に身近に受け容れられる外国人団体となった。

2012年、華豊の友の働きかけによって、あすでは、内モンゴルの shilinhaote で十年計画の植林のプロジェクトを始めた。木の苗及び管理費は、多くのトヨタ自動車関連企業や個人の寄付によるほか、あすでと華豊の友は、チャリティーコンサートやバザーなどの活動を通して、積極的に基金を集める活動を続けている。あすでと華豊の友、そして地元の人々が共同で植林と管理を行うことで、2022年に、黄柳、樟子松、楊柴、梭梭、沙棘等の木が植えられたあす手の森は、20万平米の Hunshandake 砂地を覆うようになり、環境保全の意識もその土地に根を張っていくだろう。

あすでで活動する団体は、必ず主体性を持つボランティアであることが要求される。あすでは、社会に貢献できる思いを形にすることを提唱し、そのためのサポートを行う。あすででは、どんなに小さな思いでも、信念を行動に移すことを通して、「出会いから感動、感謝、そして活動の元気と勇気が与えられる」を体験できる。そして、各団体のボランティアは、社会により良くなる効果をもたらした達成感を実感する。華豊の友のメンバーの全てが必ずしも明確なボランティア意識を持っているとは限らないが、友情や情報、そして帰属感を求めて仲間になった人でも、あすでの理念を理解し受け入れたうえで活動する中で、自然

に社会貢献ができる。あすてで活動する団体もボランティアも、自分の活動に社会的な意義を感じ、人々を引き付ける力があることを知る。

### トヨタの輝きを飾る人々

トヨタ自動車と関連企業は、自動車を提供することで豊かな社会に貢献するのだけでなく、公益事業を支持する形で社会発展に責任を背負う。51年前、憩いの家を作るときから、トヨタグループなど百余りの企業が賛助金を提供してきた。あすての半世紀にわたるボランティア組織としての運営にとって、これらの企業からの賛助支援は、貴重な資金源となっている。

豊田市はトヨタ自動車の成長に伴って発展してきた都市である。トヨタ自動車の業績と輝きの陰には、それを支えて来た数えきれない市民の貢献がある。あすてに集い、母親のようになって勤労青少年を支えたことは、トヨタ自動車の歴史の一ページとなっている。豊田彬子理事長は、最後にこう話した。「あすてはただの公益団体で、理事長という肩書は何の知名度もなく権利もない」。しかし、あすての公益活動に関する呼びかけや協力要請には、豊田市もトヨタグループのどの企業も積極的に対応し、協力してくれる。一方、どのような個人、団体からでも、よりよい社会にするための計画の提案があれば、あすてから実現のための全面的なサポートを得ることができる。あすてが人々にとって、社会に貢献する夢の実現を体験できるゆりかごであることは、そこで活動するみんなが知っている。

豊田市では、行政、産業、学校と市民が一体となって国際都市の建設を目指し、情熱があって、しかも温かさが有る社会の中で、人材育成のいろいろな取り組みが意欲的に進められている。豊田市全体が、トヨタグループの輝きを増す役割を果たしながら、よりよい社会実現への願いを全世界へ発信している。

文/ 欧陽蔚怡 图片/公益財団法人爱思德 提供